

カンボジア通信

カンボジア教育支援基金 (KEAF-Japan) 会報

2017年6月

83号

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5
JICA地球ひろば気付

カンボジア教育支援基金事務局

info@keaf-japan.com
http://keaf-japan.com



高校は2部授業解消へ

プリンター支援に大喜び 次年度大学奨学生は募集取りやめ

奨学金の後期分を届け、10月からの新学年度奨学生の枠などについて学校側と相談するため、3月に中学、高校を中心に支援学校を一回り訪問した。訪問の度に変化の風を感じるのだが、今回は各高校で校舎増設が進んで、近いうちに2部授業は8、9割方は解消する見通しになったことだった。

小中校一貫体制整う

16年開校のプラティアート高校は、同名の小学校、中学のキャンパスにつながっていて、小・中・高一貫教育体制が整ったと生徒も地域も喜んでいる。新校舎は日本ワタミ財団の支援。しかし電気はまだ。先生たちのパソコンは校庭に設置した太陽光パネルに頼っている。生徒は10年生と11年生だけで、秋には3学年が揃う。しかし内戦終結後のベビーブームが続いているので、一部授業を維持できるか心配とのこと。

同中学はKEAFの前身、CEAFが1994年に校舎を建設・寄贈したのが始まり。生徒の増加に伴い2005年に日本のNGO(JHP)が新校舎を寄贈している。

州都に4階建て教室

州都にあるプレアンドン高校では4階建て40教室の建設が始まっていた。来年度からは2部授業はほぼ解消する。昨年はサッカー州大会で優勝、統一テストの成績でもいつもトップ争い。セイン・レイ校長に「さすが州都の高校」と持ち上げたところ、「いや、ライバルがいて今年はサッカーでもテストでもやられて、2番です」という。この相手は同じ市内にあるコンボンリュウ高校。「リュウ」は「ラオス」という意味。かつてはラオス人が多く住んでいたから名前が残った。インドシナ半島は様々な民族の興亡の地である。

「フン・セン学校」

郡都コンボントゥラバイの高校でも新校舎とサッカー場の建設工事が始まっていた。近くに寺院が開院して竣

工式にフン・セン首相が出席、その際にプレゼントしてくれたそうだ。こうした首相のお声掛けの学校は「フン・セン学校」と呼ばれている。新校舎は11月完成の予定で、2部授業も終わると先生たちは喜んでいて。

同校の生徒数は約2,000人と多く敷地も広いが、校舎も教員室も老朽化が進んで、KEAF支援校のなかで一番みすぼらしく見える。近くの古い住民によると、ポル・ポト時代にキャンパスの一部に処刑場があって、多数の犠牲者の遺体が埋められたままになっているそうだ。

大喜びされた支援品

今回訪問のお土産(学用品などの支援)の目玉がいくつかあった。ひとつはプロモルプロム高校が以前から欲しがっていたパソコン・プリンター。10月に奨学金前期分を届けたさいにプノンペンで手頃の品を見つけ、他の学用品と一緒にいつもの文房店に発注した。ところが店主が用意してくれたのはちょっと値の張る新製品。

ポーン校長は飛び跳ねんばかりの大喜び(写真中央左のカラーシャツがポーン校長)。「もっと安いもので



済まそうと思ったのだけど・・・」とは言えなかった。思わぬ予算超過で、チャーター車で案内と通訳をしてくれたソワンさんとナットさんへの支払いができなくなり、一部借金して帰国することになった。

「カメラ」を待ち望んでいたプレイトープ中学には支援者から提供を受けたデジカメをとどけた。先生たちは争うように代わる代わる手にしていた。

プレイトープ小学校には欲しがっていたサッカーチーム用ウェアとシューズ。3月の千葉・八街チャリティ・サッカー大会からの寄贈品の中からピッタリの上下揃いのシャツとパンツ17着、シャツのみ5着、シューズ13足(中型ダンボール1箱)を届けた。

厳しい次年度からの奨学金

各校長先生には次年度奨学生枠は現状維持に努めるが、若干削減せざるを得ない事態もあるかもと説明、プロモルプロム高校には大学奨学生は打ち切りざるを得ないと伝えた。先生たちはみんな「これまでの支援だけでも大変に感謝している」と理解してくれた。(金子記)

秘密爆撃の“ツケ”？ 5億ドル

カンボジア政府が拒絶 トランプ政権、なぜ突然に

カンボジアはトランプ米政権から突然、戦争中に貸した5億600万ドル(506億円)を支払えと迫られて、「話は逆だ」と猛反発している。1969年から73年まで続いた米軍のカンボジア秘密爆撃で200万人の難民が首都プノンペンや地方都市に流入、食糧危機が起こったので、米政府が2億7400万ドルの食糧、石油、棉などを支援した。これは援助ではなくローンで50年余りの利子も付いているというのだ。

軍事クーデターが続く

中立を必死に守ろうとしたカンボジアがベトナム戦争に引きずり込まれたのは、ベトナムに接するカンボジアのジャングル地帯が南ベトナム解放戦線・北ベトナム軍の「聖域」になっているとして、米ニクソン政権が1969年3月極秘裏にB52爆撃機による絨毯爆撃に乗り出したことに始まる。

その米国の爆撃から命からがら逃げのびた難民を支援したカネまで利子つきで払えというのだから、カンボジアが怒るのは当然だ。

米国は1年後には親米右派ロン・ノル将軍のクーデターを後押ししてシアヌーク殿下(事実上の国王)を追放、これでカンボジア全土はベトナム戦争と一体化した親米勢力対左翼クメール・ルージュの内戦に放り込まれた。長い戦争の間に敷設された大量の地雷や米爆撃の不発弾による被害がいまだに続いている。

誤爆？で全壊の町も

KEAFが支援するブレイヴェン州との往復に通過するメコン川フェリーの町ネッルーンはこの秘密爆撃の誤爆を受けた町として知られる。1973年8月の爆撃で町は完全に破壊され、一般市民137人以上が死亡、268人が負傷した。同町はベトナムとカンボジアを結ぶ幹線道路1号線がメコン川と交錯する戦略的要衝だった。「聖域」とされたジャングルとは遠く離れており、「誤爆」と称した意図的爆撃との見方も強かった。

戦争終結—恐怖政治—代理戦争

1975年4月にポル・ポトが率いるクメール・ルージュが全土を制圧、ベトナムでもほぼ同時に親米政権が崩壊して長いインドシナ戦争は終わった。だが、カンボジアにとってはポル・ポト恐怖政治の始まりだった。78年末にポル・ポト派と袂を分かった親ベトナム勢力をベトナム軍が押し立てて侵攻、ポル・ポト派は北西部のタイ国境ジャングルに逃げ込んだ。しかしカンボジアがソ連を後ろ盾にするベトナムの勢力圏に入るのを好まない米国と中国がポル・ポト勢力を支援し、大国の代理戦争としてカンボジア内戦はさらに20年あまり続くことになる。

大国にとっては冷戦のひとコマだったのかもしれない。カンボジアからすればローン返済どころか、秘密爆撃で始まった悲惨な半世紀の全てを補償してほしいと言いたいところだろう。

写真はネッルーンの町の中央に建てられたポル・ポト政権打倒の戦勝記念碑。ともに戦ったカンボジア兵とベトナム兵の銅像だ。2015年に同町をバイパスしてメコン川をまたぐ鉄橋が日本の援助で完成したためフェリーが運航停止、ひしめく乗船待ちの車と物売りの女・子どもでむせかえる混乱はウソだったかのような閑散とした町になっている



米大使は人権派

現地の報道によれば、プノンペンの米大使館は法的には借金は返済してもらわないと処理できない、カンボジア経済は高い成長率で復興しているから払えるだろうと言っている。カンボジア政府はクーデターで生れた非合法政権の借金を引き継ぐ責任はないと突っぱね、

ライバルの中国は昨年、8千900万ドル(107億円)の借金を棒引きしてくれたとけん制も。

米国が古ぼけたローンの返済をこの時期に持ち出したのはなぜだろうか。W・ハイド大使は国務省幹部も務めたベテラン外交官で人権重視派。オバマ政権の任命である。トランプ政権の「反オバマ」政策の一環との観測がある。一方、何をやってもうまくいかず、自ら敵に仕立てたメディアとの対決で大わらわのトランプ大統領がこのローン返済にまで気が回るとも思えない。ちょっとした謎だ。

.....

大学奨学生の新規募集は取りやめ

在学中は3人、3年後に全員卒業

9年間続けてきた新大学奨学生の募集は、残念ですが次年度から取りやめます。高校生奨学金を08年度(07,10 - 08,9)から始めたのに続いて、翌年の09年度にプロモルプロム高校を卒業して大学に進んだ1人を奨学生に加えたのが大学生奨学金プログラムの始まりでした。

大学奨学金はプロモルプロム高校からの強い要請と、当時1年間日本語教師として現地に

ホームステイしていた児玉裕史君(東経大学生)の熱心な働きかけがあって始めました。しかし1人当たり高校生奨学金の10倍近い金額が必要なので継続できるか自信がなく、試験的な試みでした。2年後に楓千賀子さんから大学生奨学基金として200万円の献金を頂き、11年度から枠を2人に増やしました。しかし財政のやりくりが必要になり、17年度には枠を1人に減らして給付額も500ドルから400ドルに引き下げました。それでも次の18年度からは新規奨学生募集は難しくなりました。

これまで大学奨学金を受けたのは11人。大学を卒業して社会に巣立って行ったのが6人、7月にはさらに2人が卒業します。18年度に残るのは4年生2人、3年生1人の計3人。19年度の終わり(2019年7月)に最後の1人が卒業します。学業を続ける学生への奨学金支給は継続します。

大学を卒業して社会に巣立って行ったKEAF大学奨学生は、高校の先生、銀行マン、産婦人科・小児科の医師を目指して実習中の女子学生と、それぞれカンボジア国家再建の役割を担って活躍中です(会報80号参照)。後輩の奨学生もこれに続きます。彼らは日本とカンボジアの友好・相互理解の推進にも役立ってくれるでしょう。

(写真は大学生奨学生とプノンペンの喫茶店で話し合い。2016年6月)



野党潰し進める政府・与党

18年総選挙へ向けて 反政府勢力リーダーに逮捕状

奨学金の後期分を届けてプノンペンから帰国した3月30日は、内戦終結後に生まれた政権の腐敗を迫及する数百人の市民のデモに4発の手投げ弾が投げ込まれ、17人が死亡した事件から20年目に当たっていた。デモを率いていたのはサム・レンシー氏。デモを襲った犯人はいまだに分かっていない。だが、民主派勢力に対する政

権側の最初の弾圧で、フン・セン独裁体制への前触れとされ、プノンペンの新聞はそろって事件を振りかえる長文の記事や写真を掲載していた。

首相2人の変形政権

1997年のカンボジアは国連監視下の制憲議会選挙がポル・ポト派の妨害を乗り越えて実施され、シアヌーク国王のもとに新しいカンボジア国家が生まれて3年目だった。しかし、内戦中にシアヌーク殿下が結成した民族統一戦線とクメール・ルーージュ(共産党)と袂を分かった人民党の勢力が拮抗、双方のトップ、民族統一戦線ラナリット殿下が第1首相、人民党(6頁に続く)

ありがとうございました (2017年3月31日～5月24日)

年会費、寄付金、奨学金を振り込みくださった方々に心からお礼申し上げます (敬称略させていただきます)

(東京) (神奈川) (東京) (東京) (東京) (東京)
京) (東京) (京都) (東京) (東京) (東京) (東京)
(静岡) (東京) (東京) (東京) (東京) (東京) (大阪)
(東京) (東京) (東京) (東京) (東京) (東京) (神奈川)
(神奈川) (東京) (神奈川) (東京) (大阪)
(神奈川) (神奈川) (群馬) (大阪) (神奈川) (東京)
(神奈川) (東京) (東京) (東京) (神奈川) (熊本)
(ドイツ) (熊本) (東京) (東京) (大阪) (千葉)
(東京) (長野) (東京) (東京) (千葉) (神奈川) (東京)
(埼玉) (埼玉)

※お名前は個人情報なので伏せて掲載しています

※写真つき奨学生紹介の3、4頁は個人情報保護のため省略

「野党潰し進めるフン・セン政権」(5頁からの続き)

第2首相と首相職を分け合う変形政権という不安定な状況にあった。

サム・レンシー氏は民族統一戦線において財政経済相を務めたが、党幹部の腐敗を激しく批判して1995年除名され、自分の名を付けた政党を結成した。ボディガードの青年が死を賭して手投げ弾の破片を受け止めてくれたおかげで軽傷で済んだが、デモで混乱を引き起こした責任者として追及されて国外に脱出した。襲われたデモの中に米国人が含まれていたことから、米連邦捜査局(FBI)も独自に捜査、犯人はフン・セン首相の護衛部隊と判断したといわれる。

クーデターと野党躍進

このデモ襲撃事件から3か月後の1997年7月、ラナリット、フン・セン両派武装勢力が衝突、ラナリット殿下は国外に逃れた。「フン・セン」クーデターだった。フン・セン首相は着々と独裁体制を固めていった。シアヌーク殿下は退位、息子のシハモニ殿下に王位を譲った。

2013年7月の下院選挙を前に、シハモニ国王の恩赦でサム・レンシー氏が帰国。サム・レンシー党と人権党を統合した救国党を結成して党首に座った。「変革」をスローガンにネットを駆使した選挙戦を戦ってブームを引き起こして55議席を獲得、人民党は前回の90から大きく後退して68議席。定員123議席は両党に2分された。

救国党はこの選挙結果は人民党の不正によるもので、実際には救国党が勝っていたと主張して、1年にわたって議会をボイコット。労働組合や市民の支持を得て、人民党に対抗する勢力となった。次の選挙で政権交代もささやかれる情勢になった。

再び逮捕状・亡命

フン・セン首相と人民党は危機感を強めた。次の選挙は2018年。裁判所が2015年11月、サム・レンシー党首の逮捕状を発行した。同党首は08年の演説でホーナム・ホン外相の名誉を傷つけたとして禁固2年の判決を受けた。しかし海外亡命中で刑は執行されないまま国王恩赦で帰国、政治活動を続けていた。新たな逮捕状で海外にいたサム・レンシー氏は帰国不可能となった。

政権側は野党党首の逮捕は国際世論の批判を浴びる恐れがあるので、同党首の外遊中を狙って逮捕状という同氏追放のカードを切ったとみられる。政権はさらにケム・ソカ副党首も訴追して、2016年9月に本人不在のまま有罪判決が下された。

政権側が1年後の選挙戦を待たず、その前哨戦とみられた6月の地方選挙を前に本腰を入れて救国党潰しに乗り出したのだ。そして救国党員や同党支持の市民たちががっかりさせることが起こった。パリに亡命中のサム・レンシー氏が2月、党首を辞任すると発表した。フン・センは狂気だ、自分が身を引くことによって救国党を破壊から守る—そう語ったと伝えられた。

サム・レンシー氏が去った救国党に対する弾圧はさらに強まった。カンボジアの法律では、党首および副党首という首脳が訴追されたり有罪判決を受けたりした政党は政党登録を拒否され、政治活動は許されないという。新聞が連日、大きく報道していた。

フン・セン首相は20年にわたって怖いものなしの独裁権力を享受してきたように見える。しかし、そのフン・セン氏にとってもサム・レンシー氏はトゲのような存在だったといわれる(ニューヨーク・タイムズ紙)。民主主義を求めるカンボジアの市民たちはこれからどう戦っていくのだろうか。(金子記)